AMDA Journal ー 国際協力 ー 12月号 □2003年12月1日発行（毎月1回1日発行） 1995年11月27日 第三種郵便物認可

月刊

AMDA 国際協力 Journal

12

DECEMBER

2003.12.1
(VOL.26 No.12)

中南米プロジェクト

↑ 災害マネージメント能力向上プロジェクト（トリアージ訓練）

↓ スタディツアー

ペルー

災害マネージメント能力向上プロジェクト（患者搬送訓練） ↑

リプロダクティブヘルス向上ワークショップ ↓

↑ 巡回診療

↓ 農林業支援プロジェクト

ホンジュラス

エイズ予防青少年育成ワークショップ ↑

ボリビア

救急救命研修 ↓

AMDA
国際協力
Journal

2003
12月号

◇

CONTENTS

ホンジュラス：
学校での農業指導

◇中南米プロジェクト特集
ペルー災害マネージメント能力向上プロジェクト …… 2
ペルーの若者に対するAMDAの活動 …… 6
AMDAペルースタディツアー報告 …… 7
ホンジュラス活動報告 …… 9
ホンジュラス農林業支援プロジェクト …… 11
ボリビア救急救命研修 …… 13
◇スリランカ医療和平プロジェクト …… 14
◇ミャンマー報告 …… 17
◇寄付者名簿・神奈川支部便り …… 19
◇事務局便り …… 20

表紙の写真

AMDAが活動している中南米・ペルーの子ども達

ペルー首都リマ市の公立小学校３年生。ペルーは、南米大陸の北西部に位置し、中央にアンデス山脈が南北に走りその西側は太平洋に面した乾燥平地地帯、東はアマゾンの熱帯雨林地帯となっている。太平洋沿岸に位置する首都リマ市は、人口の3分の1にあたる800万人が居住し、政治経済活動が集中する大都市である。ペルーでは、中南米のその他の国と同様に、貧富の差が激しく、それは居住地域や生活環境を見れば一目瞭然である。学校教育についても、一部の裕福な子どもは私立の学校へ行き、貧困層の子どもは公立の学校に行くという構図がある。

AMDAは、リマ市内の公立学校生徒を対象に、HIV/AIDS予防を含めたリプロダクティブヘルス向上のための参加型ワークショップを実施している。

イーバンク銀行からご寄付いただけるようになりました

この度AMDAはイーバンク銀行（http://www.ebank.co.jp）に口座を開設しました。イーバンク銀行に口座をお持ちの方は、手数料無料でAMDAにご寄付いただけます。

詳しくはAMDAホームページ（http://www.amda.or.jp）をご覧ください。

ご協力お願いします

書き損じハガキを集めています

＊書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたらAMDAにお送り下さい。

＊使用済テレホンカードは収集しておりません。

【送り先】岡山市楢津310-1　AMDA事務局

※お問い合せは、TEL　086-284-7730
FAX　086-284-8959

ペルー災害マネージメント能力向上プロジェクト

AMDAペルー　ヨシ・ヤマニハ（調整員）

防災セミナーを行う筆者（左）と津曲専門家（右）

住民の防災意識向上のためのラジオ放送（筆者：右）

2003年、米州開発銀行（IDB）日本プログラムの支援により、モケガ県オマテ市において、地域の防災体制強化を目的としたプロジェクトを実施した。この地域は地震やその他の自然災害に直面するため、災害に対応できる防災体制を築く事が必要とされていた。

この目的を遂行するためにプロジェクトは三つの段階に分けられ、8ヶ月にわたり4つの分野（市民防災委員会の組織づくりと活動計画、地域住民の組織化、トレーニング、及び住民間でのコミュニケーションの向上）で実施された。

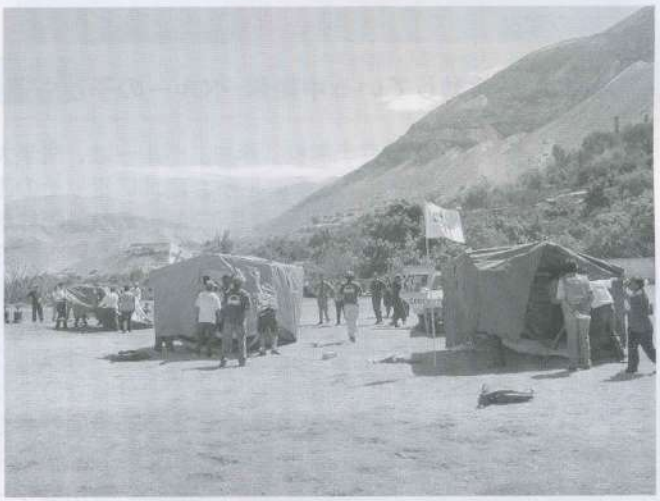
第一段階では、オマテ市の災害マネージメントに関するニーズを把握するために防災体制の調査を実施した。この調査は住民と政府関係機関についてより知識を深め、また将来の活動を計画するためのデータを入手するために有意義であった。

第二段階では、ボリビアの救急救命研修インストラクターにより、医療従事者、教師、建設工事労働者、及び一般住民を対象に救急処置訓練を実施した。

また、政府関係機関と市民団体からなる市民防災委員会を設立した。この委員会は、同地域の防災活動を進める上で中心的役割を果たすものである。参加者間の関係を深めるために、スポーツ大会、小旅行、及び教育的な活動等を実施した。その結果、救急処置を行なうために、若者層のグループを訓練し、"Juventud Forjadora" という若者ネットワークを組織した。今では教師、建設工事労働者、そして一般住民がプロジェクトについて情報を共有するだけでなく、そのネットワークがその他の町や遠隔地域の住民へも情報を提供している。

この地域には多くの失業者や資金不足等多岐にわたる問題があり、災害に対応できる体制を築くため、私達はこれらのニーズに対する活動を行った。より多くの機会をつくるためにベーキング（パン、ケーキ、パイ等を焼く）のワークショップやコンピューターコースを開いた。とりわけ上記 "Juventud Forjadora" のメンバーはこれらの実習から多くのことを学んだ。メンバーは自分達が焼いた製品（パン、ケーキ、パイ等）の販売を始め、それから得た収入を彼らの活動資金に充てた。活動

レスキュー活動の訓練



学校生徒が参加したテント組み立て訓練

プロジェクトとオマテの思い出

◇

ベアトリス・ウルキア（オマテ現地調整員）

防災ポスターコンテストの参加者

計画の中には市街地や僻地に於ける定期的な地震防災訓練や研修等の活動に市民防災委員会を支援する事が含まれている。

第三段階では、日本より阪神大震災の際、AMDAの緊急救援活動を率いた津曲兼司医師を招聘し、防災セミナーを実施した。このセミナーの内容を活用し、地方自治体や住民の参加をえて、地震防災訓練を実施した。私達は全住民が参加できるよう、様々な状況を考慮にいれた。学生達は防災訓練のためのポスターコンテストに参加したり、一般住民が安全地域へ移動している間に、テントを設営し、負傷者の世話をした。若者ボランティアはレスキュー活動を行った。

また、地域住民に同地域におけるリスクを考慮させるため、プロジェクトのコンテストを実施した。例えば、多くの地域では人々は中央広場をアスファルト塗装するために資金を費やすが、彼等は貯水タンクを所持していない。コンテストを実施するために、自然災害に直面した場合、住民が如何にして災害から身を守る事ができるかを、彼等自身による提案を促すためガイダンスセッションを開催した。

このようにして、住民の経済的な活動により地域の諸問題を解決し、彼等自身の防災対策をより充実させるため、私達は住民の参加を通して、災害対応能力を高め、その活動が持続するようプロジェクトを実施した。災害マネージメントに関して学んだ事を人々に広める事により、より多くの住民がその恩恵を受けている。

「思い出すことで再びその生活を味あうことができる」と人は言う。私達を分け隔てなく仲間として受け入れてくれた人達とこのプロジェクトに参加できた私も同感である。

現地政府関係者に防災に関する調査を行う筆者（左）

防災訓練を住民に知らせる筆者

現地若者ネットワークの防災活動のためのイベント

人の満足した様子を思い出すことはとても楽しい。皆と分け合うために何か新しいものを持って来た人、遠距離のためやいろんな活動が首都に集中しているために以前は入手困難な物を手にした住民達に彼等の地域の安全性について話しに訪れた時、彼等が話してくれたことがなつかしい。

このプロジェクトは地域住民の防災体制の向上を考え参加した若者ネットワークのメンバーにとって非常に有意義なものとなった。メンバーは、地域のプロジェクト指導者として通常なら自分の家族と過ごしたり、農家で仕事をしたり、週日一生懸命働いたので一息入れるための週末まで返上して、何とか時間を作り出して、懸命に活動した。他の人と交流するときも常に積極的だった。活動を通じて誰かが他の人を尊敬し心配したり、ありのままで分かち合ったりすると、そこには何の障害もないと言うことを教わった。

言うまでもなくグループの間で困難な状況やいざこざもあったけれど、これはメンバーそれぞれの性格に違いがあるからである。私達は、人それぞれが何らかの問題をかかえているが、辛抱（強さ）、尊敬、友情、そして理解する事の大切さ

も学んだ。その過程には時間がかかったけれど、私達はその大切なものを手にすることができた。

別れはとても悲しかったが、後にのこる相手が心の通い合った人達だと耐えることができる。AMDAのスタッフが間もなくオマテを去っていく事を聞いた住民が感謝の気持ちを表し始めた時、別れに対する心の準備ができた。総合地震防災訓練には町中皆が参加した事等、皆が私達の活動を評価してくれ、とても幸せに思った。政府関係機関もAMDAの活動を通しての人々の融合、AMDAと一緒に活動した地域の若者、各地域での活動、特にネットワークのメンバーによる防災体制を築くための準備に対しAMDAに感謝の意を表した。私達をラジオ局に招いてオマテの人々にさよならを言う機会をつくり公共の場で感謝の意を表した。その日、ラジオ局の責任者は全住民と関係当局を代表して話し、ラジオ局の職員や私達にとって非常に感動的なひと時だった。

ついにオマテを出発する時が訪れた。ネットワークのメンバーは最後まで私達に同行し、互いに連絡を取り合い、いつまでも友達でいよう、と約束をかわした。発展するためにはより多くの支援を必要とするオマテに仲良くなった友達を残してさよならを言う事はとても辛かった。

私は個人的にまたキャリアとして今回の経験に満足し、オマテでできた友達のように、私自身がより素晴らしい友達との交流ができる様努力を続けたいと誓っている。

いつ彼等を再び訪ねることができるかわからないが、神の加護のもとに彼等の幸せを祈っている。

いつでも今回のような経験ができるとは限らない。それ故、このプロジェクトのために私達の能力を信頼し機会を与えてくれたAMDA、IDB、及び関係各位の皆様に心からお礼を申し上げたい。

オマテの皆様のご好意、AMDAが下さった素晴らしいチャンス、重ね重ね、ありがとうございました！

お別れに一言

◇

オマテ若者ネットワーク

別れはネットワークの全員にとってとても複雑な瞬間である。私達は一方ではAMDAのメンバーとすばらしい友好関係を築き、多くの経験をする事ができた事を心から幸せを感じている。しかし他方では、彼等はここから去っていくし、いつ又再会できるか分からないから、非常に寂しく思った。

私達は最初、オマテのプロジェクトを通じて今年中に団結しお互いを理解し合う事は難しいだろう、と話していた。その時一NGOが私達の地域向上のために一緒に働き、実地指導をしてくれ、さらには小規模ビジネスを始める機会を作ってくれると誰が信じることができたであろうか。私達の大半は別の町の人達を訓練できるとは想像もしなかった。しかし私達はAMDAと一緒に危険地域に位置する町々を訪れ、住民に応急手当てについて指導し、自然災害に対する防災や対応について訓練することができた。

若者ネットワークによる住民への防災トレーニング

防災訓練の準備

防災に関するグループディスカッション

徐々にネットワークによる活動がオマテで有名になった。私達はブルーのTシャツ（プロジェクトのTシャツ）を着ている事を誇りに思い、友達の中には“あなたの着ているようなTシャツがほしい。どこで買える？”とたずねられると、このTシャツは誰でも入手できるものではないし、買う事もできない。Tシャツを着るに相応するだけの仕事をしなければいけないと伝えていた。

大きな問題のひとつは私達の異なった町々で防災訓練の研修活動を実施するための資金の不足だった。このために、いくつかの機関は時々支援してくれたけれど、彼等自身が資金難に見舞われ、継続的ではなかった。この様な理由でAMDAは私達自身が自立するためにベーキングを教え、小規模ながら製品を売る事により収入を得、地域のために社会福祉活動やリスクマネージメント（危険管理）に関する活動を続ける事ができた。

AMDAは町の安全のために若者達が活動している事を知っている現地政府へ提出する活動レポートのまとめ方についても助言してくれた。

このレポートは市民防災ボランティアや若者ネットワークのメンバーとして幾らかの支援を受けるチャンスを与えてくれるという意味で、私達にとって非常に大切である。AMDAが私達の活動を証明してくれたお陰で、間もなく事務所にするためのプレハブ住宅とテントも一つ寄付してもらえる予定である。これは活動を続けるために、会議をするにも適当な場所もない私達にとって絶対必要なことである。プレハブ住宅は私達の活動を認めて市長からネットワークへ譲られる土地へ設置される予定である。

私達はあなたからの支援がある事や、味方を必要とした時あなたがそこにいる事を知っている。

ありがとうAMDA。あなたのお陰でオマテの若者はお互いをより良く知る事ができたし、友達にもなれた。以前はお互い顔を知っていただけだが、今はお互いに相手を気遣い、尊敬し始めている。

ありがとうAMDA。あなたは私達に成長、発展、理解、そして私達が人の役に立つ機会を与えてくれた。私達と一緒に働き、常に私達は重要なメンバーだと感じさせてくれたAMDA、ありがとう。

私達を訓練し、教育してくれたAMDA、ありがとう。

あなたの友情と寛大な優しさをありがとう。

AMDA、私達の友達、ありがとう。近いうちに再会できますように。あなたはいつも私達の心に中にいる。

（翻訳　藤井倭文子）

プロジェクトの評価
米州開発銀行ー日本プログラム

ペギー・ツカコシ

米州開発銀行（IDB）は日本プログラムを1999年5月に開始した。日本プログラムの目的は、経済開発および社会開発に関する知識、経験、および専門技術を日本およびその他のアジア諸国からラテンアメリカおよびカリブ諸国（LAC）に移転することである。LACの国民と、日本およびその他のアジア諸国の国民とがより緊密に理解しあえるよう、このプログラムが媒体となるようデザインされている。日本プログラムを通じて米州開発銀行は、この2地域の連携を強化するために革新的な種々の活動を実施し、グローバリゼーションを充実させ、多様化している。

この目的に沿って、アジアとラテンアメリカ間の知識の交流活動として、日本プログラムは、ペルーのモケガ県で災害対策分野の能力を構築するプロジェクトに資金を提供してきた。これは小規模のパイロット事業で、モケガ県オマテ市の政府および住民に、災害に関する計画立案および対応能力を構築することを目的としている。

このプロジェクトの実施はAMDAに委託された。AMDAは日本に拠点を持つNGOであり、ラテンアメリカのボリビア、ペルー、ホンジュラス、コロンビア、およびガイアナなど世界中に事務所がある。また、コミュニティの参加を通じて自然災害に対する脆弱性を減少させることに広い経験を有している。基礎的な救急技術および災害対策技術に携わるボランティアを訓練するためのシステムを導入するというこのプロジェクトは、現地レベルから考察した場合非常に画期的であった。その訓練者が他のコミュニティのメンバーを訓練することができる。このプロジェクトはまた、防災訓練などのトレーニングに携わり、地元のラジオ局と協力して番組編成をした結果、災害対策についての意識を高め、すばらしい役割を果した。

現地若者ネットワークと意見交換する評価チーム(中央が筆者)

市民防災委員会・住民・IDB・AMDAのミーティング後

我々は8月19日から21日まで現地を訪れ、プロジェクトの評価を行ったが、簡潔に言えば、プロジェクトのすべての目標が成功裡に実施された。AMDAの支援によりコミュニティがこのプロジェクトの実行に深く関与した結果、そのメンバーは自分の能力が向上したと思うと語った。このことを見てもこのプロジェクトは持続的な効果を生むであろう。

私達がAMDAと共に働いたのは今回が初めてであったが、日本プログラムも受益コミュニティーもAMDAの仕事ぶりに大変満足している。AMDAのプロフェッショナリズム、地元コミュニティの能力向上へのコミットメントと情熱は評価に値する。

（翻訳　田辺　敦子）

ペルーの若者に対するAMDAの活動

◇
エスカルレット・パロミノ

AMDAペルー支部はリプロダクティブヘルス（性と生殖に関する健康）を促進するために、ペルーで設立された民間非営利団体である。その設立当初からAMDAは10代の若者がHIV/AIDSの危険がない性行動がとれるように、安全な行動、態度、価値観を高める活動を行ってきた。

様々な学校での取り組みの間に、リプロダクティブヘルスについて、知ってはいるが、性にかかわるリスクに直面したときの精神的なもろさを理解する点で問題のある生徒に多く出会った。また、学校教育にはどうしても限界があるが、それは性に関する情報を伝えるだけに終わっているからである。

一方、子供や思春期の若者の性の保健に関する最近の統計によると、これらの人々の精神的なもろさは、主として限られた教育、経済、雇用の機会などのために起こっているとのことである。

これらの状況を考慮に入れるならば、子供や思春期の若者の保健の問題は互いに関連しあっているということを強調することが重要であろう。別の研究によれば、貧困、家族内の問題そして保護のない環境などは、共通の危険因子である。また、保健問題は文化や支配的な社会規範によって引き起こされる不適切な行動や生活様式に密接に関係している。

このようにして、われわれの活動は感情面、心理面、社会面を考慮にいれて、包括的に性の問題に取り組むことである。生活の質を向上させるために、自己管理を強め、健康的な行動を身につけさせること、また子供や思春期の若者が、彼等の健康に影響をあたえるこれらの要因をよりよくコントロールし、また、自分たちの人生のためによりよい決定が下せるように、自分自身の資源を管理する方法を身につける学びの場を提供することである。

このような方法で、彼らが自分たちの外面的なまた内面的な特徴に気づくようになり、自分たちの生活に責任を持てるようになるためにはどうすればよいか知ってもらうために、我々は努力を続けている。

我々は情報は必要ではあるが、十分なものではないことを認識しており、参加型の手法を用いて、考え学ぶ場を作ることを提案する。すなわち参加者が互いに顔を合わせ、生徒とワークショップのファシリテーターの両方の発展向上を図るようなワークショップを組織することである。

そのため我々は様々な活動を実施している。ファシリテーター養成の目的は、首都リマの学校の子供や思春期の若者に、リプロダクティブヘルスのワークショップを実施できる大学生を訓練することである。この活動で我々はリプロダクティブヘルスについて大学生の知識を深め、彼等の技術を高め、またワークショップのための教材をいかに準備すべきか彼等に伝えている。

高校生対象のワークショップ

子供や思春期の若者が、性の問題に関して、自ら適切な対応ができるように、訓練を受けた大学生は、自分たちが学んだことを公立学校の生徒に対して実施している。大学生は年齢別のワークショップの手法を学ぶ。自分を知り、評価し、自立することによって、自己のアイデンティティを確立するために、自尊心、社会的能力そして性と生殖に関するセルフケアについて学ぶワークショップがその一つ。肯定的な思想、感情、伝達を促進するワークショップ。心理的、性的な統合を乱す危険性のある状況を確認しそれに立ち向かうための社会および感情にかかわる手法を学ぶワークショップなどである。

また子どもの性と生殖に関するセルフケアの行動を促すために、我々は教師や親を対象に活動を行っている。我々は親に子供の育て方について、またそれがいかに子供の自尊心に影響をあたえるかについて話し、家庭内での話し合いが重要であること、また性の問題、家庭内暴力および性的虐待について話すことの重要性を強調する。教師については、生徒の成長を促進するために、カウンセラーとしての役割を強調する。

最後に我々は心理的、社会的な問題について情報を収集、分析するために調査研究を実施している。

◆

AMDAはペルーのリプロダクティブヘルス向上のために活動を続けている。現在このプログラムを担当している人々は、その目的のために訓練を受け、ボランティアとして活動を実施している。今、彼等はいっそう高度な技術を身につけ、同じ目的の、すなわち若者達の生活の質の向上を目指す、新しいボランティアを育成する責任を担っている。

AMDAペルースタッフの意見

AMDAペルーは“肌で感じ”そして学んでいる。我々はすべてのメンバーが一つの家族のように一体となって活動し、資源が乏しく、限られた教育の機会しかない人々を支援してきた。スタッフのそれぞれのメンバーは、自己の専門知識を実行に移す機会だけでなく、子供や思春期の若者のリプロダクティブヘルスを向上させる総合的な活動を通じて、新しい考えを生み出す機会をも得た。

また、教育や保健の従事者を育成する機会を持つことによって、我々は彼等の知識を深め、満足感を味わう機会を与える。それは我々の活動と共通の

小学生対象のワークショップ

教材を作成するスタッフ（筆者：右）

ゴールに向かっていっそう努力しようという気持ちを促進している。

AMDAの活動に参加する大学生ボランティアの声

指導者育成の過程で、社会の時事問題を知り、創造的な解決策を提案することが重要である。これに関して、AMDAペルーはメンバーに、10代の妊娠、HIV、性的虐待などについて人々を教育したり、訓練をしたりする機会を提供する。そして子供や思春期の若者がよりよい生活を享受できるように、セルフケアを促す。

個人のレベルでは、指導者として成長し、チームの一員としていかに活動すべきかを学び、様々なグループをまとめる技術を向上させる機会に恵まれている。

AMDAペルーの活動は、確信と尊敬と支援という精神的基盤に基づいており、グループの団結を強固なものにし、我々を一つの家族のように感じさせる。

AMDAペルーのメンバーとして、我々は、こうした活動を促進し目標を達成するためにサポートしたいと考えている。

（翻訳　菊井　伸也）

AMDAペルースタディツアー報告

2003年8月21日～8月29日

スタディツアーで見たペルーの過去と未来

栗山　倫子

その小学校の教室には3年生33人が行儀よく座っていた。「みんなは自分のことが好きかな？どんなところが好きかな？」授業の進行役を務めるAMDAのファシリテーターが問い掛けると、子供たちは一斉に手を挙げ、順番に答えていく。子供らしい元気さにあふれた教室だ。寸劇やファシリテーターとのやり取りで自分の体を好きになろうとすることを通じ、自分と他人への尊厳を養い、リプロダクティブヘルスの向上を目指すというのがこの取り組みだという。

ファシリテーターのワークショップの後、日本の茶道のお菓子と抹茶をクラス全員にふるまった。準備を整え、点前の亭主を務める私が始まりの礼をすると、教室は静寂に包まれた。子供たちが見ることに集中し、「しーん」とした教室に、茶せんと茶碗のこすれる音が響く。最後まで静けさは持続し、あれだけにぎやかだったワークショップの前半とは好対照をなした。

教育一般について言えることかもしれないが、子供たちの将来のために尊厳を養うといった取り組みの成果が現れるのは、本人が成長した後、つまり十数年後のことで、それもはっきりとした形で成果が現れるわけではない。それを調査し、評価することは困難だと思う。しかし、ファシリテーターが話すときや、おそらく生まれて初めて見る点前の様子を眺める子ども達の眼差しは、真剣そのもの。その彼らを見ていると、後に「あの時間は自分にとって必要だったな」と思える取り組みなのではないかと思える。話を聞く姿勢をきちんと持った子供たちに、ファシリテーターの話が通じていると信じたい。

マチュピチュにて

さて、首都リマでAMDAの取り組みを見学した私たちは、一路、マチュピチュへと向かった。道中、バスの窓の外に広がるジャングルの中に野生の極楽鳥花が見える。鮮やかなオレンジ色のくちばしに、緑色のトサカという鳥の頭そっくりの花は、日本では見慣れぬ造形だ。地球の裏側にいることを実感する。

バスを降り、入山手続きを済ませ、歩いても目指す遺跡はなかなか見えてこない。足を滑らせれば谷底へまっさかさまかと思わせる藪をすぐ脇に、うねうねとした道を進む。と、突然、視界が開ける。中国の山水画に深緑を染め付けたような山がいくつもそびえ、それぞれの山がポンチョをまとったように山頂付近に石組みの「街」がへばりついている。大勢の観光客が遺跡の中を動き回っているのが、まるで蘇ったインカ人が住み込んでいるかのようだ。縦に細長い山の上に、重く巨大な石で街を造りあげたことを思うと気が

ワークショップ見学
AMDAペルースタッフとの交流

遠くなる。何故、こんな困難な場所にこんな大きな遺跡を建造することができたのかと不思議で、また、こんなことをした祖先を持つペルー人に対する見方も変わってしまう。

私は、スタディツアーの参加にあたり、インカの遺跡とペルーの現代社会に非常に興味を持っていた。それらをいちどきに目の当たりにできてしまった今回のツアーにはとても満足している。さらに、今まであまり知ることのなかったNGOの方々の取り組みを拝見し、その力を実感するとともに自分に何ができるかを考え直すきっかけにもなった。

最後になりましたが、ペルーの方と交流するためにお茶を振舞いたいという私の申し出を快く引き受けてくださったAMDAの富岡さん、田中さんのご厚意と、ツアー中いろいろな心配りをいただいた参加者の皆さんには心から感謝します。

スタディツアーの感想

本郷　順子

一度は行ってみたいけれど私には無理という国が世界にはたくさんあります。ペルーもその一つでした。この夏、AMDAスタディツアーの案内の中にその名前を見つけて旅行は現実のものとなりました。それは予想を上廻る感動の連続でした。いろいろとお世話になりまして、ほんとうにありがとうございました。

世界平和、国際協力等、言葉は数多くありますが、まずお互いが相手のことを良く知ることから始まると思います。それぞれ気候風土によって、おのずと物の考え方、生活の仕方、習慣、周辺の国々とのかかわり方等々異なっていて、そして歴史となって現在に至ると思うからです。そしてAMDAの「相互扶助」の考え方は最も基本的で重要なものであると思います。様々な違いを越えて、手を取り合い、気持ちをつないで、平和な世界を目指すというのは何と素晴らしいことでしょう。

2003年9月22日、国連総会において、「取り組みを劇的に強化しなければ2001年の国連エイズ特別総会の掲げた目標達成はできない」との中間報告が発表されました。この大きな課題に取り組んで、AMDAペルーでは以前からHIV/AIDSの予防について、このプログラムを実施するためのファシリテーターの育成をはじめとしてそれに連なる様々な活動が展開されています。この他にも防災に関するものなどそれぞれのプロジェクトについて目標達成のために努力されています。AMDAでは勿論この他世界各国で災害時の救援、難民などとなった人々への支援、その他多種多様な活動が行われています。皆様のご努力に心から敬意を表しますとともにどうぞ健康でご活躍なさいますよう（特に海外へ派遣されていらっしゃるスタッフの方々）願っております。

スタディツアーに参加して

本郷　博子

世界遺産マチュピチュ、大空に響き渡るフォルクローレ、インカ文明の遺跡…。ツアー出発前、私はガイドブックで名所ばかりをチェックし、まさに観光気分で参加した。しかしこの旅で様々な人に出会い、そんな自分を反省したのだ。

ペルーではHIV/AIDS予防プログラムが実施されていた。その活動には多くの学生ボランティアが参加しており、心理学を専攻する方々が主だった。彼らはリマ市内の小・中・高校に行き、各学年の理解力に合わせてワークショップを行っていた。高校生に対するそれは、自己確知を求めるものだった。自分の存在意義を知ることで、他人を思いやることに気付かせるのが狙いだ。ボランティアの学生は事前にアンケートを実施しており、その回答に基づく詳しいシナリオを作成して実践に臨んでいた。また、小学生にはお面やぬいぐるみを用いて、自分を好きになりあるがままの自分を認めることを、分かり易く芝居仕立てにして教えていた。

お茶を手渡す栗山さん

活動を終えた食事の時、ボランティアの大学生に子供たちの反応について尋ねてみたところ、『初めは嫌そうに席に座っていた子供が、ワークショップが終わって帰る時には「また来てね。今日はありがとう。」と言ったことがある。それを聞いて嬉しかった。この活動を頑張って続けようと思った。』と語ってくれた。私は彼女のこのプロジェクトに対する熱意と信念を感じた。それらはボランティアの方皆さんに共通している。

彼らはHIV/AIDS予防プロジェクトの指導者になるための訓練を受けた『ファシリテーター』であるとのこと。AMDAペルーは恵まれた人材を十分活かすための教育・養成により、大きな効果を上げている。私は今回のツアーでAMDAペルーの活動について学び、更には誠意と情熱を持って支援することの大切さを改めて確信した。このツアーで出会った全ての人に感謝！

ホンジュラス活動報告

AMDAホンジュラス　渡辺　咲子

1. はじめに

いつもご支援いただきありがとうございます。AMDAホンジュラスは事務所を設置してから今年で4年目になりました。ハリケーンミッチの緊急救援に始まり、保健衛生指導、コミュニティ薬局設置・運営支援、排水溝建設による衛生改善、生活向上支援、HIV/エイズ予防教育、青少年育成プログラム、無医村巡回診療と活動の範囲を広めてきました。

ホンジュラスは中央アメリカに位置し、ニカラグア、グアテマラ、エル・サルバドル、北はカリブ海、南は太平洋に囲まれた国です。国土は11万2000Km2(日本の約1/3)、人口は約607万人が住んでいます。ラテンアメリカ、カリブ諸国の中では、ハイチ、ニカラグアに続き3番目に貧困率が高いと言われています。98年に来襲したハリケーンミッチは、国家経済に約36億ドルという未曾有の損害をもたらしました。復興については一応の目処がついたものの、依然国際社会からの支援が必要です。

2. ホンジュラスにおける青少年問題

ホンジュラスでは、昨年に引き続き首都テグシガルパにおいて、青少年育成教育を行なっています。青少年育成教育とは、単に性教育、エイズ教育に留まらず、子供たちに意志の疎通、自己表現、教育の必要性を認識し、性、エイズについてどのような姿勢で受け入れたらいいのかについてワークショップを実施するものです。

性、エイズについて、子供たちは既に色々な情報や知識をもっています。それでも、エイズは減少するどころか増えつづけ、若年妊娠、不法堕胎も増加しています。それはなぜでしょうか？単にエイズ、性に関する知識不足なのでしょうか？私はそうとは思えません。子供たちは親の知らないうちに、色々な情報を入手してきます。中には、常識からかけ離れたこともあるでしょうし、間違った情報も多く入ってきます。子供たちは親や成人とのコミュニケーションがうまく取れないために、こうした誤った情報を信じ、また、悪いことは自分には起こるはずがないと信じている子供が多くいるのではないでしょうか。その結果、HIVの感染や若年妊娠、または教育持続の断念へと繋がっていっているのではないかと考えます。

青少年プログラムでは、一方的に講義するのではなく、生徒達が各テーマについて考え、意見を発表する、もしくは、記録に残す事を行なっています。これは、日常の体験を再認識し、さらにその利点、欠点を知るためです。

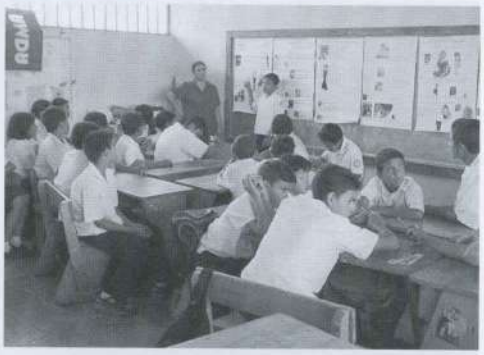
ここで、プログラムの一部を紹介します。若年妊娠について、中学2年生に、友人知人の体験談を書いてもらいました。

「僕の隣人は中学一年生で、一時期学校に通わなくなった。彼女にはボーイフレンドがいて、両親が妊娠に気づいた時、彼女に対して殴打した。その結果、中絶し、学校にも通わなくなった。その後、彼女は自殺してしまった。」

「ソニアは同じ学校に通っていた、同級生だった。13歳のとき彼女は妊娠し、退学した。彼女の恋人は子供を受け入れたが、両親は彼女達を見放した。二人の経済状態は、結婚して生活できるものではなかった。そのため彼は麻薬の販売人として家計を助けたが、警察につかまり今は刑務所で生活をしている。その後、彼女は誰の助けも受けず働き、無事出産した。出産後、彼女の家族は子供を受け入れた。子供は1歳を向かえ、彼女は子供のために今も働いている。」

「中学3年生の友人は、年上の恋人を持っていた。彼女はその恋人から「愛の証明」を要求されていたが、彼女はその結果が怖くて、拒否していたが、最後には恋人を受け入れた。その後、恋人は、彼女が妊娠しているのに気づかず、彼女と分かれてしまった。彼女は母親に事実を話したが、激怒した母親は彼女を勘当した。彼女は誤った決心をしてしまった。子供を中絶し、自分の命さえも絶ってしまった。」

この後、若年妊娠の欠点と父親、母親の責任と条件について、発表してもらいました。両親の責任として、一番多かったのは、子供を愛すること、次に、教育を受けさせることでした。そのために、両親になることの条件として、経済的に家族を養うことができることという意見が圧倒的に多く聞かれました。



青少年育成ワークショップ

保健衛生教育

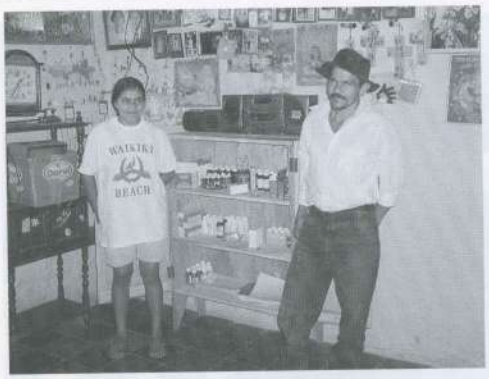
こうして、一つのテーマから、思春期の学生が、行動を起こす前に、何を考えるべきか、その利点と欠点を考えることができるよう、プログラムを進めています。

3. ホンジュラスの保健事情

ホンジュラスは、近年保健医療サービスの改善を図ってきているものの、国民の約40%が未だ医療施設へのアクセスを得られず、特に貧困地域では、医療サービスを受けることさえ困難となっています。ヘルスセンターと呼ばれる、保健所では2レンピーラ(約13円)の診療代を支払うことで、医師の診察と、薬の配給が行なわれますが、いつも必要な薬品が保管されていることはなく、殆どの患者は一般薬局で、購入しなければなりません。

活動の中心であるトロヘス市はニカラグア国境に位置する、丘陵農村地帯です。このトロヘス市には、8箇所のヘルスセンターがありますが、そのうち医師がいるのは一ヶ所だけです。その他のヘルスセンターには准看護師が各1名配属されています。

トロヘス市を管轄するホンジュラス



トロヘスのコミュニティ薬局

キューバ人医師との協力による巡回診療

保健省第一衛生地域の新生児死亡率は、ほかの地域に比べて高く、ホンジュラス全土では1,000出生児中34人の死亡に対し、同地域では1,000出生児中45人です。2002年、この地域では18,000件の出生報告がされ、そのうち792人の死亡が報告されています。これは月にすると58人から60人の新生児が亡くなっている計算になるのです。

この原因の一つとして、保健医療サービス機関へのアクセスの悪さがあげられます。それはヘルスセンターから遠い、または道路状況が悪いということです。また、人員の不足により、妊産婦に対し十分なケア、教育が行き届いていないということがあげられます。住民の知識不足、伝統的治療法や迷信を信じ、診察、成長コントロールを定期的に行なわないことも、新生児死亡率を悪化させている原因と言えるでしょう。

AMDAではヘルスボランティアを育成することにより、住民への保健衛生教育、疾病予防と早期発見、ヘルスセンターへの患者紹介を行なう、プライマリーヘルスケアに重点を置き、ボランティアの教育を行っています。また、ヘルスセンターへのアクセスが悪い16箇所のコミュニティに薬局を設置し、薬品を安価で提供しています。

3年目を迎えたトロヘスのコミュニティ薬局は今も順調？に運営を行なっています。「順調」という言葉にどうしても？（ハテナマーク）を付けたくなるのには理由があります。トロヘスの住民やホンジュラス保健省にはAMDAのコミュニティ薬局を高く評価していただき、16コミュニティ全てが、現在も運営を行なっているから順調なのです。しかし、現在、薬品の購入はAMDAが製薬会社と交渉して首都でおこなっていますが、私達が撤退した後はどうなるのでしょうか？

実際にホンジュラス各地で様々な事業が行なわれ、高い評価を受けているものもありますが、援助側が撤退してしまえば、すべて白紙に戻る事業がたくさんあります。トロヘスのコミュニティ薬局もそうなってしまうのでしょうか？ボランティア達に、もし、AMDAが撤退したらコミュニティ薬局はどうなるのか、尋ねてみました。ボランティア達は、自分達で組織をつくり、コミュニティ薬局を続けていく意志があると言っています。彼らの熱い思いが醒めないうちに、現在、ボランティア達と、トロヘスコミュニティ薬局委員会の定款作成、組織化を行い、自己運営できるよう進めています。

ホンジュラス　こぼれ話

AMDAホンジュラス　渡辺　咲子

皆さん「ラテン」と聞くと、なにを想像しますか？陽気、常夏、サンバ、他にもたくさん想像がつくと思います。ホンジュラスは、まさにラテンの国、何をするにもMas o Menosマス オ メノス（適当な、良くも悪くもないと言う意味）。私はラテンと聞くと、ホンジュラス人の主人を持つ私が言うのはおかしいですが、なぜか「いいかげん」と想像してしまうのです。

AMDAホンジュラスでは昨年より青少年育成プログラムを首都テグシガルパ市内2箇所の学校で行なっています。このプログラムは、ホンジュラス保健省が作成した教本とAMDA独自のプログラムを併せ、小学6年生と中学2年生を対象に行なっていますが、ここで活動中に体験した、ラテンの「陽気さ」、「のんきさ」について少しお話したいと思います。

青少年プログラムは、開始前に各校の校長先生とプログラムの内容、所要時間、期間を調整し、週2日間、一日2時間でプログラムを開始することになりました。私たちの予定では、6月から開始し、8月にはプログラムが終了する計画でしたが、実際に開始してみると、なかなか予定通りには行かないもので、約束の時間に学校へ行くと、校門がしっかり閉まって、生徒の声がしないのです。どうしたのかと思い鉄の扉を叩き続けると、中からガードマンが出てきて、「今日は先生たちの講習で休校になった」、「先生たちのストライキで休校になった。」「今日は18日で*マラの日だから休校になった」、「担任が病欠しているから、生徒は家に返した」など、一ヶ月に2、3回は中止することになってしまいました。そして、9月は独立記念の月と呼ばれています。9月15日の独立記念日にはホンジュラス中の学生が、マーチングバンドを先頭に、各町をパレードするのが恒例で、9月が近くなると町のあたらこちらからバンドの演奏が聞こえてきます。この華やかなお祭り騒ぎの後、公立学校は一週間の休暇に入るため、今年9月に公立校で授業をした日数はなんと7～8日間だけでした。時々、本当に授業時間をこなしているのかと不思議に思うことがあります。それでも、子供たちは進級し、卒業していくので、ホンジュラスの子供たちが授業に遅れないように熱心に勉強をしているのか、ホンジュラスの教育がマス オ メノスなのでしょう。

この原稿の締め切り当日である今日も、教師やその他の公務員達のストで幹線道路が閉鎖されています。スタッフのエメルソンはどうやら、このストライキに巻き込まれたようで、お昼近くなった今も出勤していません。

*マラとは青少年暴力、犯罪グループのことで、マラは大きく分けて2つのグループがあり、その一つがマラ18という名前なのですが、最近マラ達が18日にあわせ、犯罪、暴動を起こしたり、敵対するグループへの襲撃が行なわれたりしています。

4. 無医村巡回診療

2002年10月より開始した巡回診療は、エル・パライソ県内の無医村を毎月一回キューバ人医師団と一緒に行なっています。ハリケーンミッチ以来、キューバは、ホンジュラス国内で医師の不足している地域へ医師団を派遣しています。

AMDAではこの医師団と協力し、無料診療を行っているのです。キューバ人医師団は14人（整形外科医1名、外科医1名、感染症専門家1名、その他一般診療医11名）の大所帯です。その分、患者さんを多く診療することができ、その数は、半日の日程で600～900人にのぼります。

キューバ人医師の殆どは、僻地のヘルスセンターに派遣されていますが、専門家を含む4名は、エル・パライソ県の中心病院に勤務している為、この巡回診療で外科的処置が必要な患者や、他の専門医師の診療が必要な患者に対しては、その場で手術の予約や、診察の紹介を行なっています。

ホンジュラス農林業支援プロジェクト

◇

野菜栽培専門家　瀧本　里子

プロジェクトの概要

AMDAでは、昨年に引き続き国際農林業協力協会（AICAF）のご支援のもと、ホンジュラスのトロヘスにおいて、地域農林業振興と栄養改善を目指したコミュニティ開発プロジェクトを実施している。

昨年度は、AMDAのコミュニティ薬局がある16の村落を対象に森林科学の専門家が、森林、農業、栄養状態および生活状況について調査を実施した。その結果、薪用や農地化のための森林伐採、農林業についての知識および技術の不足、農作物の種類が少ない、子どもの栄養状態が悪い、といった問題が確認された。また、農林業を促進し、生活状況を向上させたいという住民の意欲も明らかになった。今年度は、この調査結果に基づいて、子どもの栄養状態が悪く、また、住民の同事業に対する参加意欲が強い2つの村落（エスパニョールとグアニト）において、野菜栽培と植林の技術移転を行うため、それぞれの専門家が派遣された。

8月から10月にかけて実施された専門家の活動は、村落の資源を活用・保全し、持続可能な農業法を住民と探り、確立するというものである。具体的には、堆肥作りなど地元の材料を使用しての土壌改良や、自然農薬作り、混作、輪作、を通じて積極的に持続可能な農業を進めていく。

活動時期が雨季であったこともあり、多発する病害や虫害などを生きた材料としながら、簡単な診断もできるよう農薬の正しい使用方法と組み合わせて勉強会を実地した。現地では野菜の消費量がとても少なく、バリエーションも少ない。現地に豊富にある果物、野菜の栄養価を再認識し、また新しい野菜の導入なども視野に入れた栄養講座、野菜の調理・試食なども実施した。

今後は、地元の農業機関がフォローアップを行い、家庭菜園を普及させ、家庭の自給率を上げ、栄養改善と健康管理を促進していく。

住民への野菜栽培を指導する筆者

感　想

活動もあと一週間で、各コミュニティへ最後の訪問を残すのみとなった。現地に着いてからは毎日夕方には土砂降りの雨が降り、日本では主にハウス栽培に関わり、ボリビアでは乾燥地帯での野菜栽培に携わった私はこんな雨降りでは、病気がいっぱい出るだろうな…と心配していたが実際その通りになった。とにかく短期間なので、いかに現地で活動している農業機関から情報を引き出し、結果が出ている技術を移転するかがポイントになると思い繁盛に足を運び、情報交換に力を入れた。また、実践技術の元にある理論的な「なぜ、そうするのか」という基本的な概念を知ってもらい、たとえデモストレーションで結果が出なくても意欲を喪失することなく応用できるようにしたいと考えた。予想していた通り、又はボリビアの経験からも、理論的な説明はなかなか難しく、識字率も低い事から絵や写真やパワーポイント、ホワイトボードなど視覚教材を使用して行った。

やはり興味を示すのは、自然農薬や堆肥づくりなど実践トレーニングでみんな興味津々だった。自然農薬は、農薬と同じ効果を期待していたのでは「効かない」という印象を持たれてしまうので、農薬と組み合わせて使うように指導したが、農薬も買えないという人が多かった。現地の主要生産物のとうもろこし、フリフォール（赤豆）には殆どの農民が除草剤、化学肥料を使用しており、適切な農薬利用方法が分からずに農薬の多量利用と多回数散布による出費に悩む農家が多い。また、現地で一番悩まされている虫害は、私も初めて出会った「葉切り蟻」だった。ぎょっとするくらい大きな蟻で、ペンチのような歯を持っていて、噛み付かれたら肉も食いちぎられそうである。一夜の内に野菜などは茎だけを残して葉っぱを全て巣に運び去ってしまい、果物の苗木、成木、殆どの木の葉っぱを食いつくしてしまう。

植林の活動で、地元の学校や森林開発公社から寄贈していただいた材木用の苗木、事業で購入した果樹の苗木をコミュニティに引き渡す際、この葉切り蟻対策には力を入れた。「ソンポポ

(葉切り蟻)にやられた」という話しはこの辺りでは常識化している。しかし、効果的な農薬はあり、必要な手入れを怠った為というのが最大の原因なので、地元で効果的な対策法を確認し、オレンジととうもろこしの生地と農薬で作る毒餌も作るなどして、苗木を守った。今の所被害はとても少ないが、幼苗、成木に関わらず被害は出るので引き続き手入れをすることが必要である。

栄養価の高い野菜の導入ということでビタミンCを多く含むブロッコリー、カリフラワーの栽培の導入を試みた。収穫まで2ヶ月以上かかるため、栄養講座を企画し、その後ブロッコリー、カリフラワーの調理、試食も行った。その際、女性の日頃の仕事を再認識してもらうために、男性が調理実習をするという試みも行った。彼らの伝統的な習慣に新しい野菜を導入する時はやはり「この野菜、美味しいじゃないか！」→「なんていう名前？」→「栄養もあるの？」→「作り方は？」という風に栽培意欲をかきたてるために、とにかく「食べる」ことから始めた。これはなかなか効果的だったように思う。

自分が食べた事もないものは栽培しないし、地元で食べる習慣もないのに売れるわけはない。先ずは家庭内で色々な食べ方を模索し、嗜好にあわせた食べ方が定着し徐々に広がっていく。新しい野菜が普及するときというのは、こういうプロセスもあると思う。彼らが、栄養を考えて食べるということはないと言っている通り、その方面からのアプローチは難しいだろうと思う。しかし、食べているものにどんな栄養があり、それを評価した上で野菜とのコーディネートを指導する事が肝心かと思う。食べ方については現地で大量に使われているバターや、豚脂、香辛料なども使いつつ、美味しい野菜の調理法をフォローしたいと思う。特に女性については、野菜の調理に興味を持っている。

私自身もコミュニティに滞在中は村の伝統料理を教えていただき、夜は教会の集いに参加する中で住民の暮らしのペースというのを体で感じる事ができた。滞在したからこそ味わえた経験であった。

長い歳月をかけて作られて来た伝統的な生活、農業法というのは一つ一つに意味があり、それを他の国から来て短期間で何か結果を残そうと言う事は押し付け的になる可能性もあり、とも

野菜栽培に参加する住民

すると彼らを振り回すだけという結果にもなりかねない。もちろん、彼らが求める必要な技術の移転という大きな仕事もあるがそれを実現する上でも、もっと人間的に成長する必要があると感じている。自分がどんな農法を目指すかと言うことも含めてこれからの自分への課題である。フィールドに出る度に色々収穫があるので、それを今後に繋げていきたい。

また、ホンジュラスの植林事業には必要性を感じる。トロヘスの山は、はげ山になっており、大雨が降ると川は増水し、コミュニティへの道路は通行不能になり、崖崩れが起こり、土壌浸食も進む。洪水の危険性もある。私自身今回の活動を通して、今後も植林に関わっていきたいと思う。

8月3日にAMDA鎌倉クラブチャリティーコンサートが開かれ、収益からホンジュラスとイラクの事業にご寄付いただきました。AMDA鎌倉クラブでは、コンサートの他、バザーやチャリティー食事会、今年度からの新しい試みの、チャリティウォークを加え、さまざまな形でホンジュラス事業のご支援をいただいています。コンサートは大変な盛況で、映像と語りと演奏が一体となった「つるのおんがえし」は特に好評でした。

「つるのおんがえし」に参加して

AMDA鎌倉クラブ会員　会田　政信

「つるのおんがえし」の歌のパートを担当してくれないかと突然の打診に不安ながら少しでもお役にたてばと引き受けました。本場前日の午後3時から初めての音合わせ。琴・十七弦・尺八の素晴らしい演奏に圧倒され何遍やっても合わず、メンバー一同不安のまま本番当日のリハーサルを迎えました。当日の朝、根津先生から一枚のファックスが送られてきました。これを見てひと安心。リハーサルは大きな迷惑をかけずに何とか終えることが出来ましたが、本番に向ってこの不安は募るばかりでした。リハーサルの後、「語り」の小坂さん始め多くの方から励ましの言葉をかけられ、このことが支えとなって本番も不満足ながら無事終えることができました。

人が不安な時、困っている時にかけられる一言が、その人に何と大きな勇気と励みを与えることか、改めて思い直しました。このような一言もまたボランティアのひとつと思いました。

本コンサートは盛沢山の内容だったため裏方が大変だと聞いてましたので、出演時以外は本番での不満だった分をカバーしようと精一杯裏方をお手伝いし、「つるのおんがえし」ならぬボランティアの恩返しをしました。本番の難しさ、裏方の大変さ、大切さ両面を勉強したコンサートでした。

ボリビア救急救命研修

AMDAボリビア支部長
ホルヘ・ファイアニーニ

1998年以降、AMDAボリビアは、災害発生時の処対応の質の向上を目的としたEPRT（緊急時における予防と対応）プログラムに尽力してきました。

医師、医学生、看護師、救急救命士、消防車ドライバー、救助担当者や緊急時対応の政府担当者ら、人的資源の確保においては、緊急処置時における特定分野の知識向上を目的としたATLS（救急救命医研修：Advanced Trauma Life Support）やPHTLS（救急救命関係者研修：Pre-Hospital Trauma Life Support）等いくつかの研修コースの内容充実により、ここ数年で随分と成果があがりました。

救急治療の研修範囲は、大きく広がりました。災害場所における対応、搬送中や病院における対応といった異なる段階での外傷治療のみならず、急性疾患によって発生する緊急事態における非外傷患者の処置や、子供たちへの特別な対応についても考慮しなければなりません。

今年は6つの研修コースを行いました。2回のATLSインストラクター研修コース（1回目は、1月24日～26日、2回目は、2月21日～23日）がサンタクルスで行われ、研修参加者全員が無事に研修を終えました。3月28日～30日には、PHTLSコースを行い、32名の参加者全員が研修を無事に終えました。そして、6月28日～30日、サンタクルスで行われたATLSコースでは、14名の参加者のうち、3名がインストラクターとして認証されました。7月4日～6日には、別のコースがコチャバンバにて行われ、参加者14名のうち4名がインストラクターとして認証されました。最後のコースは、サンタクルスにて8月29日～31日の間行われました。16名の参加者のうち2名がインストラクターとして認証されました。

いずれのコースも、とても系統化された方法で行われました。参加者の評価はとても前向きなもので、参加者は、これらの研修コースは自分たちの実際の活動にとても有効であると意見を述べていました。

私たちの将来的な活動として、急性疾患患者、病理学に基づく外傷・非外傷患者のマネージメントを引き続き改良していきたいと思います。そして、私たちの医学教育施設の創設という目標に向かって、このプログラムをボリビアの他の都市にも広めていきたいと思っています。

動物を使った模擬手術

研修インストラクター
エステバン・フォイアニーニ

AMDAは、ATLSコースやPHTLSコースへの財政支援を通して、ボリビアにおける医療の質の向上のために大変役立っています。幸運にも私は10年以上にわたり、アメリカ合衆国、ドイツ、スイス、エクアドル、そしてボリビアにおいてATLSのインストラクターを務めてきました。

交通事故患者の固定と搬送の研修

経済的な余裕がないにもかかわらず、研修は最高の構成と質を維持しています。インストラクターの質は最高レベルですし、参加者はとても熱心で意欲的であり、みな達成感とともに研修を終えています。一般に参加者はみな彼らが今まで参加した研修の中で最高の研修だったと言い、彼らが今後患者の対応にあたる際、有効に役立つと思います。

AMDAの支援がなければボリビアでのATLSコースは始めることができなかったでしょう。今後、外傷患者の治療における医師の教育を自立して続けていくことになります。この活動を開始するにあたり支援をいただいたAMDAに対して私は永遠に感謝し続けることでしょう。私の同僚たちや関係者に代わって感謝したいと思います。

研修インストラクター
コラル・クリスタルド

2003年6月以降のATLSコースのインストラクターとして、ATLSコースとPHTLSコースの与えるインパクトについて短いですが、コメントしたいと思います。

まず最初に私は、数年前の学生時代にこれらのコースへの参加のための費用を半分負担してくださったAMDAボリビアに感謝の意を表します。そのおかげで私は医療研修、特に外傷患者に対する治療においての知識を得ることができました。もし今後AMDAの支援が続くなら、それは急性患者や外傷患者の処置研修に参加する多くの人々のために役立つと私は確信しています。

（翻訳　上原　康代）

ポリオワクチン提供作業の報告

保健師　相原　洋子

キリノッチDPDHS（県レベルの政府保健省）からの依頼を受け、UNICEFが中心となってキリノッチ地域66施設の10500名の児童を対象に関連NGOが協力してポリオワクチン配布を担っている事業に関し、9月20日にAMDA車両をその配布用に提供したことに引き続き、10月18日には相原保健師・北川看護師が参加、実際にワクチン配布等の作業を行いました。13の村の15施設へ搬送をし、助産師およびヘルスワーカー、AMDAのドライバーと北川看護師とともに搬送に参加しました。施設は、学校およびクリニック、マタニティホームで行われ、対象者はスリランカが予防接種推奨年齢と定める、2、4、6、18ヶ月および5歳児でした。搬送先は、道路の整備が不十分であるリモートエリアであり、車両の供給がないと、ワクチン接種を推奨するに困難な地区でした。また、母親は母子手帳を持参しており、スリランカでの母子保健の水準の高さをあらわしていると感じました。今回のポリオワクチンはUNICEFFが主なサポートをして、MOH（県保健省の出先機関）が中心となって行われました。

ポリオ投与に協力する相原保健師

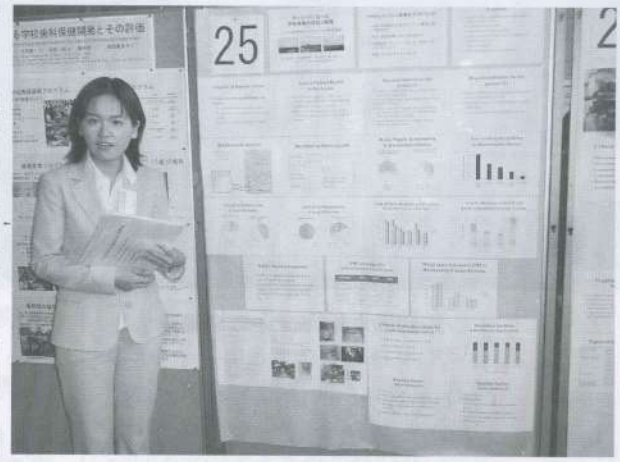
平成15年10月11日、北九州国際会議場で開催された第44回日本熱帯医学会・第18回日本国際保健医療学会合同大会に演者として参加して

調整員　村山　智子

私は学会の中で「学校保健・母子保健」のセッションにて今年2月から2年計画で開始されたAMDAスリランカ医療和平プロジェクトの一環として行われている、小学校を中心としたAMDA健康新聞について報告させていただきました。

今回の報告の対象地域であるハンバントタはスリランカ極南に位置し、10のdivisionから成り立っています。スリランカの中ではまだまだ開発が遅れているDistrictの一つとされています。95%が農村であり、住民の多くは小規模稲作に従事しています。気候は乾燥地帯に区分されており、4分の1以上の家庭では安全な飲み水の確保が困難となっています。また、虫歯保有者が多く、慢性的栄養失調も大きな健康問題となっています。

スリランカの保健、教育機関は、Provincialレベルで管轄されており、その下にDistrict, divisionがあります。学校保健は、保健・教育機関の連係で行われています。直接の学校保健の責任者は校長と保健機関のフィールドワーカーである公衆衛生監視員となっています。しかし、対象地域での基礎調査結果より以下のような事実がわかりました。学校保健の直接的責任者である公衆衛生監視員（PHI）が実際には年に1，2回しか学校を訪問していない、保健担当の教師はおらず、生徒の健康に対する教員の意識は非常に低い、保健問題としては、虫歯・栄養失調・水施設、特に飲み水施設が多くの学校にはなく、トイレ・小便器に関しては、1校を除き、残りの26校では、トイレ・小便器のいずれかが存在していますが、その清掃、管理が不十分で、放置されているのが現状である。



AMDA健康新聞について発表する村山調整員

以上の基礎調査結果を基に、今年3月からハンバントタにて立ち上げました。ここでの上位目的は、1).国民意識の形成を目指す、2). 対象学童の健康状態を改善する、ことです。対象校は生徒数が200人以下、公衆衛生監視員が推薦し、校長がこのプロジェクトに賛同・協力を約束し、活動が支障なく遂行できる地域にある学校、という基準のもとに、24校をハンバントタ4地域から選出しました。

対象校の特徴としては、約20%の対象校が学童の通学・学習環境が「劣悪」、半分の学校が「非常に劣悪」に分類されています。60%の学校が小・中一環の学校、残りが小学校となっています。対象学童は初等教育の5歳～9歳、としました。プロジェクトの主な活動内容は次の4点です。

・AMDA健康新聞作成
・PHIによる対象学童及びその家族へのAMDA健康新聞セミナー開催
・PHIとの定期会合および研修会の開催
・DPDHSへの定期報告

新聞の保健内容は大きく4つのテーマを扱う予定です。

・Oral Health
・水周り衛生
・栄養
・環境

簡単に第一号“歯を磨こう”を使った活動例を紹介しました。まず、対象校1校で実際に学童に普段通り歯を磨いてもらいどこが問題なのかを観察し

発表後、質問に答える

ました。その後、内容・構成については保健省の顧問歯科医及び、学校歯科衛生士と協議決定しました。メッセージが決定した後は、シンハラ語・タミール語翻訳を行い、その後対象校にてメッセージが学童にわかりやすい言葉であるかどうかをチェックしました。イラストは全て対象校の学童に書いてもらい名前・学年を新聞に掲載しています。新聞印刷終了後は、公衆衛生監視員と、どのようにセミナーを行うか、どの点を強調するかなどについて話し合いました。

セミナー当日は、低学年用、高学年用と家族用の3つのセミナーを公衆衛生監視員に行ってもらいました。セミナー内容は前回の新聞の復習、今回の新聞内容説明、歯磨きの練習、とし、セミナー時間は30分以内となるようにしました。歯ブラシはプロジェクトの主旨を説明した上で、スリランカ大手歯ブラシ会社より対象学童全員分寄付してもらい、歯のモデルを使用しながら、家族・教員も手伝った歯磨き練習をしました。セミナー後は、公衆衛生監視員と後日フィードバックミーティングをもち、次回のセミナーへ役立てています。

これまでの活動から改善が必要と気が付いた点は、1）学童の保健内容の理解度・健康状況に学校差があることを踏まえ、セミナー内容を柔軟にしていく。

2）セミナーの進め方を向上させるために公衆衛生監視員を対象とした研修会を頻繁に行う。3）学童の健康への教員の意識を高める為のプログラムを行う。

4）多くの学童で深刻な虫歯が見られるが、歯科医にかかっていないのが実情なため、予防の他に、早急な治療が必要である。5）セミナーで学んだことを実践できる保健衛生設備が必要であるということでした。

スリランカは識字率が90%を超え、医療費も国が負担している一方で、学校での保健教育はほとんど進んでいません。活動の中で見えてきた問題点を改善しながらさらに充実した内容にし、また地域の人々と着実に協力しながら努力していきます。

スタッフ紹介

長谷川あすか
（医療調整員）

○AMDAに希望したきっかけ

「国際協力」に携わりたい。漠然とした思いは、高校生の頃から頭の隅で浮かんで消え、消えては浮かんでいました。具体的にどのように携わっていきたいのか。その答えを探すために、何度か東南アジアの国々を訪れました。雑誌やパンフレットでは、華やかに紹介されている異国文化、それとは裏腹に、貧困・飢え・寒さに苦しみ、一人寂しく路上で死んでいく人々。それを目の当たりにしたとき、私の描いていた国際協力は、この人々に携わっていくことだと思えたのです。

そこで、日本の大学を卒業後、看護学の習得を目指してアメリカに留学しました。そして、卒業が近づくにつれ、抱き続けていた夢が国際医療活動への参加という明確な形で描けるようになり、NGOへの応募を決意しました。

○プロジェクトでの役割

メディカルコーディネーター：看護師の視点を揃えた調整員として、現地での活動が迅速、かつ滞りなく行われるよう、各事務所との連絡・調整等に当たります。

○医療和平とは

病気や怪我をした時、人間の体の中では、健康な状態へ戻ろうとする力「治癒力」が働きます。その力を最大限に働くようにするには、患者さん一人一人がその力を最大限に発揮できる環境づくりが必要となります。十分な休養、バランスの取れた食事、家族や友人の支えなどの環境と共に、最も大切なことは自ら病気に立ち向かう患者さん自身の強い意思を呼び起こすことです。

医療和平とは、「国の治癒力」を高める環境づくりだと、私は思います。長い紛争や内戦によって、傷だらけになった国家であればあるほど、国民の誰もが、かつての平和な国に、より豊かな国にくりあげていきたいという強い願い、その国の「治癒力」をもっています。その「治癒力」を呼び起こすように、「治癒力」がいっそう働くようにしていく環境整備が、各国からの経済援助、教育援助、技術援助、医療援助だと考えます。その国の人々が、人種や文化の異なる人々が、同じ立場の私たちと一緒に活動し、私たちの活動に触れることを通して、「人種・文化・宗教等は異なっても、平和を希求する思いは同じ」であることに気付いたとき、国の治癒力が呼び起こされた瞬間であると思います。そして、それらの人々が、人種や宗教を越え、相互協力の握手を求め合うとき、国際協力による国づくりへの第一歩を踏み出したと言ってよいのではないでしょうか。スリランカ医療和平プロジェクトとは、まさにスリランカの国づくりを医療援助活動という側面から支えていく事業だと思います。スリランカの人々が、一日でも早く、平和な国づくりへの第一歩を踏み出せるよう、スタッフの方々と一緒に精一杯がんばってきたいと思います。

スリランカ北部の小学校にて保健衛生教育を実施

石田祐子（調整員）

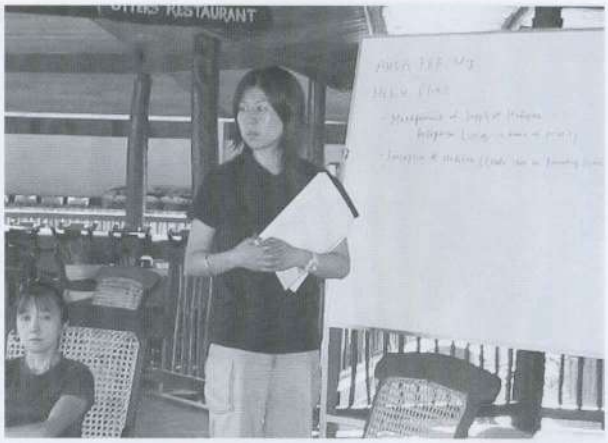
○AMDAに希望したきっかけ

アメリカでのソーシャルワーク修士課程（コミュニティ・オーガニゼーション専攻）を終えて日本に帰った際、ご縁がありました。それ以前は、大阪の光学機器メーカーでマーケティングをしていました。私がAMDAを知り、医療和平プロジェクトに参加することとなったのは本当に偶然のことですが、今では私をここに運んでくださった方々、迎えてくださった方々、そしていつも各方面から励まし見守ってくれる友人や家族に改めて感謝の気持ちを送りたいです。

私がAMDAの一員となる決め手となったのは、AMDAの現地における活動が、人々の一次的ニーズに関わる救援活動と、一般的にはその次の（ときには全く別々の）段階として捉えられている地域的な開発運動の双方を同時に、包括しているように思われたことです。いいかえれば、AMDAの活動は、緊急救援活動を行う時点で、すでに長期的で住民のリーダーシップによる地域活動を念頭におき、また実際に同じ協力過程において実行されていると、感じたのです。

○プロジェクトでの役割

北部担当の調整員として勤務しています。北部では、定期的な巡回診療と保健教育を提供することにより、20年来の紛争で疲弊した人々の健康を取り戻し、また健康に対する知識・認識・意欲また自信を高める試みがなされています。PBPプロジェクトが発足してからはや1年、私達に与えられた活動期間は限られています。今後、現行の活動を維持拡大しつつも、AMDAの活動が地元機関や組織、他のNGOによる活動の地盤あるいは模範という形になって存続するようプロジェクトをサポートしてゆくのが、私の責務のひとつだとおもっています。



AMDAスタッフミーティングにて発表する石田調整員

○医療和平とは

前述のように、私は、人々の一次的ニーズの確保につとめる活動の中にも、既に地域社会的な開発支援努力がはじまっていて、それらが働きかける効用は人々が希望と尊厳をいち早く取り戻す過程において同等の重要性をもっていると、思っています。たとえば、手洗いうがいを励行するという活動ひとつをとっても、自分自身の清潔・健康のためということに加え、家族や友人への感染予防、またそこから相手を思い遣るゆとりの心が生まれます。そして家族やコミュニティ内で役立つ知識を共有しさらには地域全体で疾患を減らすのみならず、言葉や思想の違いを問わず共に健康を増進することにまでつながってゆきます。医療和平のユニークなところは、健康という人々の普遍の願いを対立する双方に対して、サポートすることによって、紛争予防・平和構築・さらには多民族の共存を可能にする意識の統合という3つの課題に、時間軸も順序も関係なく一途に取組んでいるということです。

私たちは、過去に経験したことを前向きに理解することによって、その時をもう一度生きなおすことができます。同じように、医療・健康教育を通じAMDAの活動は、今現在効果が見られる紛争予防効果だけではなく、平和構築や多民族同士の理解の深まりへの道のりの中に、またこの国に生きる人々のこれからの暮らしの中のどこかに、組み込まれてゆくはずです。

＊スタッフに囲まれて感謝状を受取るシアミラ医師

北部キリノッチでの巡回診療に従事してくれたシアミラ医師にAMDAより感謝状を贈呈しました。イギリス国籍の彼女は、生まれ育ったスリランカ北部の復興のため、積極的にプロジェクトに参加し、多くの患者に対し診療、医療関係者に対し技術指導等を実施してくれました。

＊山根調整員よりデビバリカ高校の校長に感謝状を贈呈

今年8月実施のAMDA高校生会スリランカスタディツアーの行程として、コロンボにあるデビバリカ高等学校を訪問しました。同校ではAMDA高校生会のメンバーを踊りや合唱で盛大に迎えて下さり、交流会も開いて頂きました。日本語も非常に堪能なカルヤニ校長先生にも大変お世話になり、お礼として感謝状を贈呈しました。

ミャンマーの優しさ、暖かさに触れた

ー運動会スタディーツアーの報告ー

嘉悦大学教授　山田　　寛

私たち、嘉悦大学と東京情報大学の学生を中心とするグループは、今年も昨年に続いてAMDAのお世話になり、9月4日から13日までスタディーツアーとしてミャンマーに行き、「運動会の出前」活動を行った。田舎の小学校で、日本風の運動会を共催させていただいた。12人の参加学生には、特にミャンマーの人々の優しさと親切さが、印象的だったようだ。1から10まで面倒を見てくださったAMDA海外事業本部の景山真弘さん、ミャンマープロジェクトの岡安利治・駐在代表、藤田真紀子さん始めスタッフの方々に心からお礼を申し上げたい。以下は、2人の学生の報告である。

東京情報大学 総合情報学部
環境情報学科3年　田村　恵

ミャンマーについては今まで本やテレビなどで見て、パゴダが数多くあるアジア有数の仏教国であること、戦時中日本軍が駐留していたこと、というような漠然とした知識しかなかった。私は今回の旅で、少しでも多くのミャンマーの文化に触れるために、なるべく現地の人と会話を楽しもうと目標を立てて参加した。

ミャンマーに着いた日の午後、早速首都ヤンゴンからニャンウーへの移動となった。移動手段は夜行バス。ミャンマーでは車体に○○交通とか○○バスと書かれている日本のバスが至る所を走っている。私たちが乗ったバスも日本のバス。車内では、ぐっすり眠って順調にニャンウーに到着する予定だった。しかし、ハプニングは起こった。深夜12時位にいきなりバスが止まったかと思うと、バスの車輪が荒れた道にすっかりはまってしまって動かなくなっていた。ショベルカーのような車が救助に駆けつけてくれた。何とか動き出したものの今度はその先でダンプカーが立ち往生をしていて通れず、さらに待たされた。結局ニャンウー着は予定よりも3時間遅い午前10時過ぎ。18時間以上にも及ぶ長旅となった。ミャンマーの泥んこ道は、この国の経済困難のシンボルだ。バスが動けなくなった時私たちは不安でいっぱいだったが、ミャンマーの人々はなぜかとても落ち着いていたことが未だに不思議でならない。

ニャンウーに着いて、ゲストハウスにチェックインした。「こんにちは」。そういきなり女性から日本語で話しかけられて驚いた。オーナーの家族という彼女とすぐ仲良くなった。マーケットで買ったロンジーを着せてくれたり、タナカ（ミャンマーの白粉）を塗ってくれたりと、彼女は姉のような存在だった。

私たちが運動会を開催した村はAMDAの「母と子のプライマリーヘルスケア」プロジェクトの対象地域であり、保健センターが設置され、呼吸器系疾患などの子どもが多いこの地域の巡回診療や保健教育、栄養指導などの支援が行われている。最初のミエニ村へは大きな涸れた川を渡って行かなければならない。最初の訪問時は村の人々のあたたかい歓迎で、川岸から牛車に乗っての移動となった。牛車に乗るのも、こんなに大きな乾いた川を渡るのも初めてで、とても貴重な体験をさせてもらった。村の人々にこれほどまで歓迎されるとは思ってもみなかったので、本当にうれしかった。村では歓迎の踊りを見せてもらったり、一緒に踊ったり、頭につける花飾りをもらったり、楽しいひと時を過ごした。運動会も大勢の村人が集まってくれて、盛大な運動会となった。

万国旗を背に二人三脚の選手たち（ミニエ村）

ミエニ村での運動会の翌日、私たちはイラワジ川をボートで渡り、パコック市へ、そしてAMDAの巡回診療の視察にキンモンカー村へ行った。250人ほどの村人が集まり、みんなこの巡回診療を待ちわびていたという感じだった。この村でも私たちは花の首飾りを一人ずつにかけてもらい、歓迎を受けた。

ところが、この夜、私は急に具合が悪くなり、高熱が出てしまった。この日まで食事もおいしく食べていたし、運動会や村で元気に動き回っていたので本当に急な出来事だった。AMDAの診療所でドクターに診察をしてもらい、薬を飲んで2日間寝込むこととなった。そのためにチュンキンジー村での二つ目の運動会には参加できず、パゴダからのサンセットも見られず、悔しい思いをした。しかし、このことで、人々のやさしさを改めて実感した。AMDAのスタッフのMa Moe Moe Lwinは2日間、ずっと私に付き添ってくれた。ゲストハウスの人々も心配して見にきてくれたり、おかゆを作ってくれたりした。参加した仲間や、AMDAのスタッフも本当に心配してくれた。私はミャンマーに来てこのみんなのやさしさが一番心にしみた。

ヤンゴンへの帰りは飛行機だった。藤田さんをはじめAMDAスタッフ3人が空港まで見送ってくださったが、私はこの数日間を思い出して、別れのときに涙を流してしまった。

ミャンマーでの最後の夜。私たちはヤンゴンのAMDAトレーニングセンターに宿泊した。この日、ここでは全国から集まった伝統医療医師への鍼灸講習会が開かれており、夕食は医師の

皆さんとの交流パーティーだった。初めはビルマ語もあまりわからないので、ただ笑顔でご飯を食べているだけだったが、だんだんと溶け込んで、私の持っているビルマ語の本をもとにいろいろな話をした。パーティーの後、体調の良くない私に医師たちは鍼灸治療を行ってくれた。日本でも鍼灸治療などやったことがない私は不安だったが、女性医師たちは笑顔で私の手を握って「大丈夫よ」と言うように落ち着かせてくれた。鍼灸治療をやっている間も私たちは本を片手に話をしていたが、鍼もお灸も気持ちよくてだんだん眠くなってしまうほどだった。治療が終わるとそれまでの不思議な胃の苦しさが軽くなり、体が温まった感じがした。

この旅で私は日本では普段できないような貴重な体験をたくさんした。そんな体験ができたのも、この旅で出会った人々のおかげだと思う。ミャンマーの人々のあたたかさ、やさしさを直接肌で感じることができて本当に良かった。またいつか、ミャンマーに行って、この旅で出会った人々ともう一度会いたい。心からそう思っている。

嘉悦大学　経営経済学部３年
櫻井　啓太

ミエニ村とチュンキンジー村での運動会。競技種目は日本ではおなじみの玉入れや騎馬戦、そしてスイカ割りなど計8種目、これにミャンマーの村々の競技が2種目で合計10種目だった。日本側の用意した種目はルールを教える必要がある。必死にデモンストレーションをして説明したが通じない面があり、最初のミエニ村では障害物競走、そしてドッジボールのルールが通じず苦戦。その他もろもろ、失敗も多かった。

しかし、こうした失敗を踏まえながら行なったチュンキンジー村ではうまくできたと感じている。どちらの村も大変大勢の村人が集まり、大イベントとなったことに間違いはない。どちらの村も村人の3分の1もの人数が集まった。運動会が成功したのも、観客である村人の熱い応援があったからである。本当に感謝は尽きない!! しかし、一方では子供の数の多さから、1度も競技に参加できていない子供がいたことも事実である。そんな子供を見つけては追い掛け回し、いかに楽しんでくれるかと努力はしたものの、やはり運動会は参加してなんぼである。参加できない子供たちには本当に申し訳なかった。

騎馬戦は女の子たちも参加した（チュンキンジー村）

子供たちは、どちらかといえばミエニ村の方がガツガツしたプレーが多く、騎馬戦ではハチマキが首に絡んでも引っ張り続けて、首が絞まってしまうなどのハプニングもあった。また悪ガキどもが自分に小石を投げてきたりしたため本気で怒ったこともあった。別に嫌われた訳ではなく、この数分前に競技に参加できぬ子供たちを追い掛け回していたことが原因だろうと思う。無邪気に駆け回っていたら、子供たちは自分を「仲間だ!! こいつは僕たちと一緒だ!!」と感じてくれたのだろう！大いに有難いことだ。しかし小石投げはないよ！本気で痛かった!! そんな子供たちに比べ、チュンキンジー村は大分おとなしい子供たちでホッとした。

ただ2つの村とも運動が出来る子供がたくさんいたことに正直驚いている。一昨年ラオスを訪れたが、ラオスの子供は細く、キャシャで体重も軽い子が多かった。そのことも先入観としてあったため、ミャンマーも同じような子供なのだろうと予想していたものだ。そして健康的なのか心配してもいた。だが実際はとんでもない元気っ子だらけでおどろいた!! むしろ日本の子供たちもっと元気出せよ!! ＴＶゲームばかりし過ぎだ!! 家に溜まってサッカーゲームしてないで、外でサッカーをしなさい!!

サッカーといえばミャンマーの得意なスポーツであることが、日本人にはあまり知られてはいない。ビルマ時代にアジア・チャンピオンになった経歴もある。そこで我々は日本対ミャンマーの対抗試合を挑んだ。日本チームは高校時代スポーツで輝かしい成績を残した3人と、評論させたら右に出るものはいないキレ者1人、それに人数不足でかり出された山田教授の計5人。対するミャンマー・チームはヤンチャ集団13人。雨が降りしきり遠くでは雷鳴もこだまする、そしてなんと言ってもアウェーであり、不慣れなピッチ上・裸足といった悪条件の中でキックオフ!! 集団で押さえ込むミャンマー・チームに日本チームは粉砕されてしまった。結果は0－4。完敗であった。この悔しさはいつか必ず返すぞ!! そして対戦相手の中から未来のミャンマー代表として国際大会の舞台で戦える選手が出ることを望みたい。

チュンキンジー村の運動会を終え、我々の運動会活動は終わった。雨の降りしきる中、車は発進した。子供たちは我々が小さく見えなくなっても追いかけては手を振ってきた。自分は思わず口ずさんだ。「涙くんサヨナラ♪サヨナラ涙くん♪また会う日まで♪」。涙をボロボロ流しながら遠く小さく見える子供たちにいつまでも大きく手を振ったのであった。

子供たちの元気さに教えられたことは多い。忘れていた何かを思い出させてくれた。人は人に影響を受けながら成長していくものと考えている。だから自分はミャンマーの子供から掛け替えの無い何かをいただいた。そして自分たちも子供たちに何かを伝えることは出来ただろう。お互いに成長できることを心から願う。

そして、ミャンマーの人々からは心からのやさしさが伝わってきた。我々のミスで女子学生2人をレストランに置き去りにしてしまう事件があったが、何よりこのピンチをいち早く知り、知らせてくれたのはゲストハウスの方々であった。行く先々でミャンマー人の親切さに出会うことができた。だから短期間でも「ずっと昔から一緒にいる友」。そんな気がしてならなかった。ほんとうにありがとう♪　現在、地球は多くの問題を抱えている。だけど、ひとつの愛・ひとつの心・みんな団結して幸せになろう!!
ONE LOVE!!

事務局便り

AMDA高校生会RSK街頭募金に参加

＊AMDA高校生会の街頭募金に参加してくださったボランティア　中山　翼さんからのメッセージ

僕は元々カンボジアで子供達のために作ってあげるためにバルーンアートを始めたのですが、練習のために岡山駅前の高島屋の前でストリートパフォーマンスをやっていたのが好評だったのでカンボジアから帰ってきてもまだ続けています。そんなときにAMDAの高校生会のメンバーが街頭募金を行うと知らされたので、多少でも募金活動のお手伝いができればと思い、「高校生会の傍でピエロ姿でバルーンアートやってみたらどうでしょう？」と提案し、お手伝いの運びとなりました。ミッキーやアンパンマン等作れますので、これからもAMDAのイベントの飾りつけ等のお手伝いがあればお引き受けします。(右頁の左側写真)

笠岡市立笠岡東中学校 文化祭

『無限』というテーマのもと、コインパネルが中庭で展示されました。パネル30枚に1円玉と5円玉を約3万6千枚使用し描かれた絵は圧巻でした。生徒会を中心に企画・運営がなされ、板を並ベンジャー隊によって見事に完成致しました。そしてここで集まったコインをすべてAMDAに御寄付頂きました。

笠岡東中学校は5年続けて、AMDAへ国際協力のもと活動を続けてきました。昨年のケニアドリームプロジェクトに続き、今年は夏休みに生徒の代表がAMDA本部を訪問し、スリランカ医療和平プロジェクトを支援して頂くことになりました。パネル完成後、生徒の代表が、『世界の平和へ、世界に届け僕らの思い』そして『無限の可能性のもと、どんなことにも負けず頑張りましょう』と訴えました。

(AMDA職員　丸山尚人)

秋の一日を、ふれあい祭りで
ー桜が丘西4丁目町内会ー

10月最後のよく晴れた日曜日に、山陽町の桜が丘西4丁目町内会のふれあい祭りが行なわれました。既に15回を数えるこのお祭りで、今年はAMDAの募金箱を置き、パネルを展示してくださることになったのです。団地の各丁にある公園としては、かなり広いスペースに、模擬店が出て、ステージが作ってあり、親子連れがたくさん訪れていました。イベントも多く用意されていて、ビンゴゲームや抽選会、ミニコンサートに餅つき、餅投げもあります。このうち、餅つきと餅投げに参加させていただきました。餅つきでは、軽い杵だったのですが、3人のつき手の息が合わず、選手交代に。最後にプロがこねます。どれだけ早くついてもだいじょうぶ、仕損じることはありません。最後に餅をさらって行ってしまい、相方はガーンと空臼をつくことになり、見物の人がどっと沸いて終わります。

チャンスが多いだけに、外れた人の声が会場に響いた抽選会、そして最後に餅投げをして、お祭りは終わりました。町内会長さんが、とにかく子どもが安全に育つということを第一に考えている、そのためには、まずはきれいに保つことが安全にもつながるので、町内の清掃についてはやかましく言っている、とおっしゃっていたのを聞き、このコミュニティのまとまりの様子に得心しました。

四丁目のみなさん、AMDAへの温かいご協力と、とても楽しい一日を、どうもありがとうございました。

(AMDA職員　富岡　洋子)

＜イベント＞

11/1～4　スリランカのこどもたちパネル展　ジャスコ岡山店　10:00～
11/1～4　愛のチャリティバザー ジャスコ岡山店 10:00～
11/7～9　吉備国際大学伊賀祭「救え！戦場のこどもたち」・AMDAパネル展示
11/8　RSK街頭募金　14:00～15:30
11/15～16　RSKチャリティーコンサート「救え！戦場のこどもたち」
11/22～12/6　AMDA高校生会パネル展示　岡山県青年館

★AMDA　11月の講演会★

11/2	田中一弘 ももたろう塾連合会 会員約65名 ホテル倉敷
11/2	小平雄一 第一リハビリテーション学園
11/4	柳田展秀 城東高校 学習プラン5-1
11/4	竹久佳恵／富岡洋子 総社南高等学校 学習プラン2-1
11/6	柳田展秀 岡山市光南台中学校 光南台中学校体育館
11/7	小池彰和 高梁市立高梁小学校 高梁小学校視聴覚室
11/8	鈴木俊介 東広島ユネスコ協会 国民年金健康保養センターひがし広島
11/9	近藤麻理 男女共同参画グローバル政策対話岡山会議 国際交流センター
11/11	佐伯美苗 城東高校 学習プラン5-2
11/11	竹久佳恵／富岡洋子 総社南高校学習プラン2-2
11/13	竹久佳恵／富岡洋子 福渡高校文化祭 学習プラン5-5
11/14	田中一弘 岡山県立岡山南高校 2年生359名
11/18	丸山尚人 平成15年度第3回備西地区高校生会議 高校生34名 教員18名
11/18	竹久佳恵／富岡洋子 城東高校 学習プラン5-3
11/20	大野伸子 東京富士大学 学生120名
11/25	菅波代表 総務省岡山行政評価事務所 行政相談委員35名、職員5名
11/28	富岡洋子 田野町立田野中学校、中芸高校 高知県

AMDA活動写真展

AMDAの活動ー岡山発国際貢献

場所：トウキョウマリンギャラリー
千代田区丸の内1-2-1
東京海上火災新館地下1階
期間：12月1日（月）～12月5日（金）
9:30～17:00
ただし月曜日は13:00～17:00

＜お問い合わせ＞
特定非営利活動法人AMDA　広報室
TEL:086-284-7730　FAX:086-284-8959
または
東京連絡所 TEL:03-3473-7111 内線1002

高校生会のRSK街頭募金
ー救え！ 戦場の子どもたちー

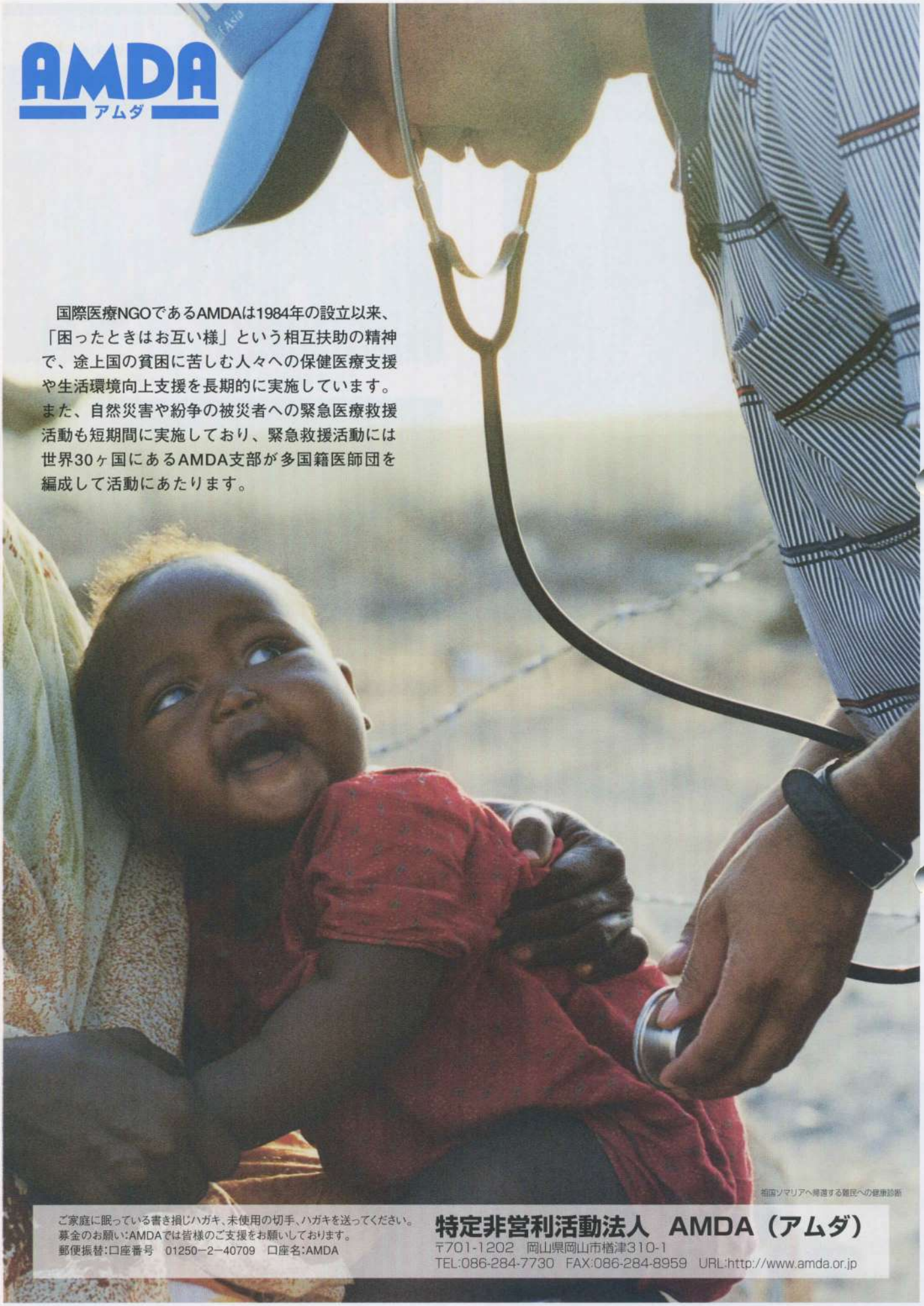
ふれあい祭り ー桜が丘西４丁目町内会ー

笠岡東中学校　コインアート

石井中学校　空缶アート

第18回 AMDA国際会議

国際協力フェスティバル2003



AMDA Journal − 国際協力 − 2003年12月号
2003年12月1日発行（毎月1日発行）VOL.26 No.12　1995年11月27日　第三種郵便物認可　定価600円
発行／AMDA　〒701-1202　岡山市楢津310-1　TEL 086-284-7730　FAX 086-284-8959
AMDA ホームページ http://www.amda.or.jp/

AMDAのポスターができました。掲示のご協力をお願いします。